



「狐につままれたよう体験」を、ごく最近の私は2度も経験した。ひとつめは貯金通帳を紛失した一件である。所定の場所から突然通帳が消えてしまったのだ。わずかな金額ではあるが、妻にも見られたくない多少後ろめたさのある通帳であることから、あまり大騒ぎもできず、記憶をたどりながら、一人でこそこそと探し続けてみたが、さっぱりであった。(完全紛失)

今一つはその日のうちに無くした一枚の書類の一件である。内容はおおよそ読んではいたので問題はなかったが、確かに先ほどはここで、と思って探してみても、とうとう見つからないままであった。

その後も、それとなく気がかりで、あちこちと探していたが、いずれも紛失確定の様様となった。まさに「狐につままれている」ような気分である。一方ではこれはまさかの病気か？との思いも沸き起こり、すっかりふさいだ気分になってしまっている。

数年前には夫婦の間で、互いの「ど忘れ喧嘩」がよくあったが、もしかしてあれが前兆だったのかもしれないなと思ったりもしている。いずれにせよこれは老いの現実であり、着実に老化が進んでいるということなのだろう。今年の夏は格別に暑かったが、私にとっては切実に「老いの自覚」をさせられた晩秋のような夏となった。 —「絶対は、絶対にはあり得ない」ということか。—

9月22日(火)は永代経です。(詳細は裏面に)

新聞原稿募集中…題材は自由です。

妻への感謝

K・Y

妻が亡くなって早いもので、すでに一年と四ヶ月が過ぎてしまいました。一周忌は「ロナの関係で、八月に延期していただきました。振り返れば今まで炊事、洗濯、子育て等日常生活のごまごましたことは全て妻に任せっきりで、手伝いもせず、関心さえ示さなかった四十八年間でした。

妻を亡くした今では一人暮らしとなり、朝起きてからは、着るものの用意から始まり、二度の食事の準備、洗濯掃除と考えるだけでも血圧が上がってしまいます。本当に今までの妻の苦勞がしみじみと分かるようになりました。ただただ感謝の思いだけが月日が経つとともに深まっていく今日この頃です。

妻は亡くなる数年前から、先を案じてか仏壇を買い替えたり、家屋の内外修理や改装を積極的にやっていました。病気が分かっても、明るく振舞いながら、逆に私たちの事を心配してくれていました。家族全員に楽しかった思い出や、「お願い」の遺書までも残してくれるほどでした。亡くなる直前には自分の人生を振り返りながら、「最高に幸せで、楽しかったわ。今では思い残すことは何も無いよ。来世でもまた一緒になろうね」とまで言ってくれたのです。私はただただ何度も頷きながら、浄土へ還っていく妻に手を合わせ、見送ることもできませんでした。

ただ私には大きな悔いが一つ残っています。それは金婚式を迎えるにあたって計画していた妻の故郷への旅行ができなかったことです。病気の事もあって、一年前倒しの5月に予定をし、幼馴染にも連絡を取り、とても楽しみにしていたのですが叶えてやることができなかつたのです。

そこで今思い立ったことがあります。それは四十五年前、妻の在所からいただいてきた椿が、不思議なことに初孫誕生の折に、三メートル西に新芽を出し、妻を亡くした昨年三月には満開となり、さらに今度は三メートル東に新芽を出したのです。これは妻の生まれ変わりか思われるほどで、十月にはぜひとも妻の願いを実現したいものだと、妻の写真と共に、金婚旅行として妻の故郷を訪れてみたいと思ったのです。帰りに故郷の土を持ち帰り、新しく芽を出した椿の新芽を包んでやりたいと思っています。

これからは、健康に留意し、畑仕事、月一回のゴルフ、週一回の光受寺茶話会や月一回の勉強会に出席し、仏壇で妻への報告をし会話をしながら、生きていこうと思っています。



